

# インテック初期の技術広報誌から

## From the Technical Spokesperson of Early Stage INTEC

ITJ編集委員会

1964年創業のインテックは10年を経過した1974年に技術広報誌として「研究紀要」第1号を発刊した。91年にタイトルを「INTEC Technical Report」と変更しているが継続して発行を続け、最近号である58号で通算493編の論文を発表している。

今回、40周年を機に「INTEC TECHNICAL JOURNAL」を創刊するにあたり、初期の「研究紀要」から故金岡前社長による第1号発刊の辞ならびに第2号巻頭言を再録しておきたい。文中に窺われる科学思想、技術への熱き思いなどがインテック社員のみならず、広く社外の皆様にも明日への希望とヒントを与えるのではと思うからである。

### 研究紀要第1号発刊に際して

(以下の文章は1974年発行の研究紀要集1号に故金岡前社長から寄せられたものです)

1970年、人類が月面に足跡を印するとは、先人も私どもも10数年前まで夢想だにしなかったことである。また、全世界の気象情報が、宇宙衛星を介してアップ・トゥ・ミニッツに提供可能になるとだれが考えたであろうか。コンピュータの開発と通信技術の発展は、人間の情報処理機能を飛躍的に拡大させ、先輩たちの想像さえ及ばぬことが、現実に展開しつつあるし、私どもが到底思い及ばぬことが、さらに実現されていくものと思われる。

一方、コンピュータの着想が、J・P・Eckertによって発表されたのは、1943年であり、すでに30年を経過し、次第にコンピュータは人々に親しいものとなりつつある。従って、コンピュータという装置は、一応の技術的安定と目安が得られ、今後は、その運用技術の急速な発展により、個々人の日常生活のものとなっていくであろう。

情報処理問題は、このように無限の発展・昇華とともに日常生活へ浸透、降下ともいうべき二面性があるように思われる。

私は、空の旅をしながら物事の二面性や科学の発展などが脳裏に去来することがある。日本列島を飛びながら、それが決して狭いとは思われず、また、大陸を旅して広いとのみ思われないのである。前者は利用と開発の工夫による解決の可能性であ

り、後者は不毛と多民族の混在と軍事的必要性に思いを致すからである。

さて、私は日頃、当社の集団的研究体質の強化を強調している。これは、きびしい経済環境を克服し、競争に打ちかっっていくために、きわめて重要なことであるからである。研究意欲の高揚をめざして特別研究室を新設し、また、ソフトウェアモジュール研究組合に参加し、その成果も徐々に上がっている。

このようななかで、ここに研究紀要第1号を発刊することは、まことに意義深いものがあり、当社の研究体質が次第に定着しつつあることを示すものである。第1号としては、いささかさみしい気もしないではないが、今後に期待したいと思う。

われわれの、地道な退屈にさえ思える日常業務が会社や社会をささえていることは、忘れられがちである。また一方、硬直になりがちな考え方を、自由な創造的発想で打破することがわれわれにとっていかに重要であるかも、日常の業務に埋没がちである。

願わくは、日常の地道な業務の中より、自由な創造的発想が生まれてくる動機に、この研究紀要がなれば、まことに幸である。

## 科学・技術・その課題 (以下の文章は1975年発行の研究紀要第2号巻頭言として故金岡前社長から寄せられたものです)

### 危惧

70年代に、転換の時代・変革の時代になるであろうと広く宣伝されていたが、予想のとおりになってしまった。ニクソンショックに始まり、石油ショック、構造不況等々と社会的インパクトは、尽きるところを知らない。

本78年度、政府は前例にない超大型予算を策定し、必死に不況よりの脱出、社会不安の抑止を計っている。しかし、経済界はもちろん多くの国民は、笛吹けど踊らずの状態である。社会的不満は、刻々地下に鬱積し、不気味にそのエネルギーが増殖し、不幸な事態を準備しつつあるように思われてならない。

現在の世相は、言い古されたことであるが、強力なリーダーシップの不足や、自由・平等に名を借りた社会的不正などより来たものであろう。しかし、その基盤として活力ある創造的アイデア、冷静な科学的視点の不足によるところも大きい。わが国は、西欧の科学・技術を導入しつつ、今日の姿を形成したのであるが、真の哲学・科学が定着していないことが危惧される。

### 科学

かつて小学校には、ろく木と称する体操器具が、必ずといってよいほど設置されていた。ある時その下に、氣息えんえんとなった何某が横たわっており騒ぎとなった。彼は、学校で最も高いところとしてろく木頂上を選び、洋がさ利用による軟着陸を試みたのであった。もちろん、かさはおちよことなり、骨折というおまけまでついでしまった。

また、こんな思い出もある。ゆうゆうと、和金・りゅう金・らんちゅうなどがさまざまに形おもしろく泳いでいた。その水そうに顔をつけんばかりに見入っていた幼子が飛びのきざまに呼んだ。

「このお魚、どうして息しているのかしら」。なるほど、人間水の中につけられては息ができない。美しい金魚たちと一つになり、メルヘンの世界に遊んでいた幼子が突然、科学の世界に踏み込んでしまったのだ。

このような素朴な新鮮な驚きを大切にしなければならぬ。なぜ、どうして、素直な疑問は、科学の世界を作った契機である。科学は自然の省察による理論という仮説を、虚心に組織し、体系化しそれによって人間の疑問に答えてゆこうとする。迫害されることがあっても、特定イデオロギーや価値基準に従属するものではない知的活動そのものである。こう考えると、人間の当然のいとなみである科学が、わが国では、財貨蓄積の少ないまま近代国家形成に急なあまり、なじみにくいものになってしまったのである。

### 技術

日本が西洋文化に直接接触した16世紀半ばに象徴的な二つの事件が起こった。一つはポルトガル船員が小銃をもたらし、種子島鉄砲の技術となり全国に伝播した事実である。この技術は、鉄砲隊を形成させ、武士団、築城法など多くの社会変革をもたらした。他の一つは、ザプフィエルやヴァリアーノが、西欧文化を移植しようと試み、ここでは、修辞・弁論・幾何・音楽・天文をはじめ、形而上学・医学・政治学・倫理学などを教授したようであるが、17世紀初めにはその短い歴史を閉じてしまった。

下って、19世紀、黒船の来航により、多くの西欧文化がわが国にもたらされた。しかし当時の為政者は欧米に追いつくための殖産興業・富国強兵の手段として西欧文化を求め、既成技術をトレイスするにとどまった。従って、わが国に学校はできても、伝統に輝く学問の府としてのヨーロッパの大学(University)が学問をする人々の組合(Union)であり、教える者と教えられる者との自発的意志による結合の上に築かれた共同体であったことを理解できなかった。

こうして、わが国は西欧文化へ真の理解ができにくいまま、技術偏重に走っていった。技術偏重は、決して技術的開花を導くものではない。太平洋戦争を前後して、最も偉大な技術である原子力・レーダ・OR技術・コンピュータ・宇宙開発など、どれをとっても、わが国で開花されたものはない。技術は、経験則の積み重ねにもよるが、科学によって構築された客観的法則を社会生活の中に積極的・意識的に適用しないかぎり、このようなビッグ・プロジェクトの進行は困難であろう。そこに科学と技術の接点があり、また分別もある。

### 課題

わが国は急速な高度成長をなすとげ、次代へのエネルギーが枯渇したようにみえる。これは最も手っ取り早い海外技術導入に狂奔して、成長を支え、また、わずかばかりの科学的知識も、あらゆる技術利用に蚕食され、来る日への知的エネルギーの蓄積がなくなったためであろう。

西欧思想を受け入れた時、切り花のように個別科学の成果だけを導入し、哲学と科学が離婚し科学と技術が結婚した事態を後追いし創造的発想が生まれなかった。行政・経済においても、科学・技術においても、受動的模倣に終始してきた風土と民族がここにある。小手先ではどうにもならない事態にきていると思う。人間思考の本質にさかのぼり、大きな転換が必要なのではないだろうか。